



社会科学研究部報

令和4年 12月 9日

浜松市教育研究会 社会科学研究部

令和4年度 第3回社会科学研究部 研修会

11月2日（水）に井伊谷小学校と浜松市教育センターにて開催されました。今年度の研究テーマである「意欲的に社会的事象を追及し、未来を問い続ける児童を育てる社会科学習～社会的事象の「見方・考え方」を働かせる授業づくり～」の実現を目指した授業の公開及び実践の発表が行われました。

井伊谷小学校

1 授業公開「学制発布150年 明治維新を進めた人々の思いを探る

～明治の国づくりを進めた人々～

山田 航生 教諭

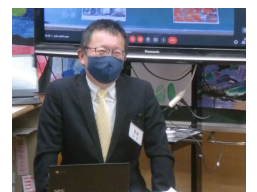
「あなたが帰国した大久保ならどんな改革を進めますか。」授業の導入は、歴史的事象を自分事として捉える発問から始まった。さっそくグループで活発な対話が行われ、子供たちは「外国に学んだ工業や商業の技術を国民に広める改革をしたかったのではないか。」と予想を立てた。その後、教師からJamboardに提示された「富岡製糸場内部の絵画資料」「戦いに向かう政府軍」「地租改正のための測量の様子」の3つの資料から明治政府の改革を予想し、調べ学習に取り組んだ。Jamboardには「資料を見て分かること」と「調べて分かったこと」を付箋の色を分けて入力した。授業の終末には、調べたことを関連付けながら、大久保らの国づくりへの思いをまとめ、全体で交流した。

研究協議では、授業内で使用するノートとタブレット型端末の役割と有効な使い方が話題に上がった。本時で活用したJamboardは、話し合いや他のグループとの意見共有に効率的であったと言える。一方、交流中の個人の考えが、学習のまとめには十分反映されないのではないかという意見も出た。改善案として、Jamboard上で複数の意見を児童に関連づけさせたり、大切なキーワードは何か検討させたりする活動が提案された。

2 指導・助言

金指小学校 山村 健一 校長

今回の授業の効果的な点は、単元全体を通して子供に力を付けさせる構成にしたところと、子供から考えを引き出しやすくするために単元を貫く問いを「なぜ」から始まるものに設定したところと感じた。一方で、めあてを「外国に負けない国にするための『工夫』」に焦点化したり、資料を1つにしぼった上で細部にまで注目させたりすることで、子供の思考が教師の意図するねらいへさらにつながりやすくなったのではと感じた。



社会科の授業では、教師がどのような意図をもって、どの資料を提示するかが大切である。教師が示す複数の資料の間にある、教師がおさえている「見えない意図」。その意図を子供に見つけさせることで、「資料から読み取って考えるのが楽しい」と体感させられる授業になる。よりよい社会科の授業を実践するためには、教師が資料に拘り、吟味することが大切である。

気田小学校 堀部 憲一 校長

社会科は資料が命である。教師は効果的な資料を収集し、そこから何を取捨選択して児童に与えるかを考えることが重要だ。今回の授業は、単元を通して豊富な資料が用意されていたことや、児童の資料を見る目が育っていたことから、日々の山田教諭の教材研究が生きていたと言える。



また、社会科は「人」の勉強であると考え、それぞれの事象には、それらに関わった「人」の感情や動機が伴っている。歴史を学ぶ際には、「人」に視点を向けることで社会的な見方を働かせられるだろう。今回の「あなたならどうする？」という問いのように、その時代に生きた人々の思いや感情を追い、自分事として捉えることを大切にした授業づくりを進めてほしい。

（文責：伎倍小 岡田 佑季 初生小 大木 健太郎）

教育センター

1 顧問校長挨拶

(4年授業ブロック)

広沢小学校 澤田 強志 校長

各学校で、行事と並行して授業研修が盛んに行われている。目の前の子供たちに力を付けさせたいという教師の願いを大切にして、日頃の授業や、本日の研修会に臨んでほしい。

(6年授業ブロック)

曳馬小学校 竹内 孝夫 校長

タブレット端末を活用することで、本研修を充実したものにしてほしい。授業者の手立てをよく見ることで、「見方・考え方を働かせる授業」になっているか、「深い学び」につながっているか、研修を深めてほしい。

2 実践発表「水害や地震からくらしを守るために、自分たちができること

『自然災害からくらしを守る』

気賀小 猿田 正人 教諭

本単元は、自然災害について、関係機関の取り組みや協力体制、防災に向けた地域の取り組みを知り、自分たちにできることを考える学習として構成された。本時は、自然災害への備えとして、自助、公助、共助という多角的な見方があることを理解した上で、既習事項を生かし、自分たちにできることを話し合い、防災宣言としてまとめることをねらいとした。

猿田教諭の授業は、ねらいやゴールが明確に示され、考えるべき視点がはっきりとしていた。そのため、終始意欲的に活動する子供たちの様子が見られた。特に、学習したことと生活を結び付けて考えられるようにと、猿田教諭が投げ掛けた「リアル」という言葉が印象的だった。リアルを追究して、防災宣言を考えることで、社会的事象への見方・考え方を働かせながら、自然災害や減災について、地域の人々や生活を関連付けることができていた。



3 実践発表「今にのこる、つながる江戸の文化『江戸幕府の政治の安定』」

気賀小 小川 怜志 教諭

本単元は、江戸の文化を今の生活や文化と結び付け、相違点や共通点を明らかにして歴史を学ぶ意義を明確にし、250年以上の安定を保った江戸時代について考える学習として構成された。本時は、江戸幕府の鎖国や対外政策について調べたことを長崎の文化と統合しながら話し合い、幕府の政策について考えを表現することをねらいとした。

小川教諭の授業は、導入で長崎の中華街の写真を提示し、そこから出島と唐人屋敷の立地につなげ、子供の学習意欲を引き出す手立てがなされていた。また、教材を深く掘り下げることで厳選された資料が提示された。この充実した資料を基に、子供たちはグループ活動を通して、鎖国や鎖国中の対外関係について考え、まとめることができた。



4 指導講評

(4年授業ブロック)

河輪小学校 太田 賀子 校長

猿田教諭のクラスは、学習のルール、話を聞くルールが徹底されており、日頃からの指導の積み重ねが、深い学びへとつながっていると感じた。「自分たちが学んだことを生かす」という単元構成により、防災意識を高めたいという目的意識が子供たちにも芽生えた。社会的事象の見方・考え方を働かせるという意味が、猿田教諭の授業を通して、より一層深まった。

(6年授業ブロック)

篠原小学校 結城 知則 校長

小川教諭の授業は、深い教材研究による厳選された資料の提示により、子供たちは資料を通して比較・総合しながら社会的事象を捉えることができていた。単元を通して学習課題を子供たちと共に作り上げていくことの大切さや、子供主体のめあてを設定することで視点を明確にした主体的な意見交流につながることを学ぶことができた。